

ぶっちゃけインタビュー 23

稲垣栄洋 さん（いながき ひろひろ）

雑草学者

静岡大学 大学院農学領域 教授

弱い雑草の 「戦わない強さ」

人間ってあまいなあ。ちよつと成功したら、そのパターンをなぞる。効率的だと言って、多様性をなくしていく。親がしっかりしていれば、その後をついていく。ほんとうに、それでいいのか。雑草は、競争相手が苦手な生き場所を見つける。親からも遠く離れる。人間より雑草の方が進化したんじゃないですか、稲垣先生。

あなたは、障害イネのおかげで生きている。

この中に、雑草イネが混じっているかもしれない。姿かたち、性質も、われわれがなじみのイネと同じ。ただ、雑草イネは実ったら穂が落ちる。

収穫ができない、売り物にならない。それも、刈るまでわからない。

実は、このイネの方が植物の本来の姿だ。

いのちをつないでいくには、穂が地に落ちなくてはいけない。

わたしたちが口にいる米こそ、突然変異で生まれた障害イネなのだ。

障害は時代が決める、社会が決める。

—日本の雑草学会の設立趣旨は雑草防除とありました。

日本での雑草の定義は、必ずしも「悪」ではありません。雑つて雑誌、雑学、雑魚とかのように、高級なものではない、取り立てて言うほどのものではない草ということですね。役に立つものではないが、少なくとも「悪草」「害草」ではない。日本では雑草魂という言葉があったり、雑草のようにたくましいって、いい意味でも使います。それって、日本人のもっている自然観の為せる業でしょう。

—歓迎されてはいないが、そんなに嫌われてはいなかった。

雑草は、一万年前ぐらいから人間が農業をはじめつくりだした特殊な環境において進化してきました。雑草は、昔は肥料にもしていました。土手の草は牛の餌にもなる。あつても困るが、なくても困る。みんな競い合つて刈ったんです。鮎や鮭のように解禁日があつたぐらいです。その日が来たら、一家総出で草を刈る。最初に刈った草は、殿様に献上するという風習もありました。

—よくも悪くも、人間がつくり出したもの。

本『雑草はなぜそこに生えているのか』（※1）にも書きましたが、雑草を除草するのは簡単です。雑草は刈らなければいずれ消えていきます。

—食べられる雑草、有用な草も雑草と呼ばれる。

仙台方面では、セリ鍋が大人気です。セリは田んぼの困り者ですけど、仙台近隣ではセリを栽培している農家もあります。セリの畑にイネが生えてきた

人が刈るから。
雑草は生きていける

—雑草（※1）って身近だけれど、名前も知らなくていい草、知る値打ちのない草のようなイメージです。いったい、雑草というのはどんな草ですか。

世界では「雑草＝悪者」です。Weed（ウィード）と言って悪い草の意味。麻薬もWeed。いい草はHerb（ハーブ）と言います。アメリカの雑草学会の雑草の定義も「人の生活の邪魔になる存在」というような意味ですね。